

「 賛美と感謝にあふれて 」

ルカによる福音書 第17章11節～19節

説教 村上修平牧師

エルサレムに上る途中にある村に、主イエスは立ち寄りました。この村には重い皮膚病を患った人々が、隔離され生活していました。隔離は、伝染病が広がらない様に予防する為に律法に定められていました。しかし、この事が、人里離れた所で寂しく住むことを強いているのです。人々には神から重い罰を受けているという目で見られるのです。それは、因果応報という考え方です。人からも、神からも見捨てられていると思われていたのです。

この村に、主イエスが入って行かれます。重い皮膚病を患っている十人の人が、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」(ルカによる福音書12節～13節『新共同訳』)と、必死で叫びました。当時、不思議な力で病を治す人々がおりましたから、主イエスもその人たちと同じだと思ったのでしょうか。しかし、主イエスは「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」(14節)と、仰いました。この時代には、病気が治ったかどうかを祭司が判断していたのです。彼らは、主イエスの語る言葉を、藁をもすがる思いで聞いていたに違いありません。そして、そこへ行く途中で重い皮膚病が癒された事に気づくのです。まるで夢の様でありましたから、早く祭司の所に行き、見て貰い、家に帰りたいたいと思いました。

ところが、その中のひとりが、大声で治った事を讃えて戻って来たのです。主イエスの前にひれ伏し、感謝して、その思いを体で表現しました。“ひれ伏す”。これは礼拝するという意味です。戻って来た人は、この方こそ、神であると分かったのです。

主イエスは言います。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」(17節～18節)と。他の九人の思いや目は別の所に向いていたのです。主イエスは神を賛美する為に戻って来た人に言います。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」(19節)と。

この話は、病気が癒されたという話ではありません。私達の魂の救いの話です。主イエスの前にひれ伏す事は、病気の癒しを越えた世界で

す。この人は、主イエスを信じる事で、神様からの大きな喜びと感謝を知ったのです。

私たちは、神様ご自身を愛しているのでしょうか？ それとも、神様がくださる“物”を愛しているのでしょうか？ 神様のくださる健康や金銭を愛するのですか？ では、くださった“物”がゼロになったら、神様を信じる事を止めるのでしょうか？ 説教の後に聖歌604番を賛美します。そこでは、“望みが消える時、数えてみよ、主の恵み。”と、歌います。私たちの人生で病があり、困難があり、孤独であっても、私たちはその中で神様の恵みを数えながら感謝を捧げることができるのです。

さて、十人の重い皮膚病を患った者の内、九人はユダヤ人で、ひとりだけサマリヤ人でありました。ユダヤ人からすれば、サマリヤ人は神を知らない外国人だと言われ、汚れていると言われていました。重い皮膚病に加えて、外国人であるという事で、見下されていたのです。ですから、このサマリヤ人にはどこにも居場所が無かったのです。しかし、主イエスはユダヤ人でありましたが、ユダヤ人だけではなく、サマリヤ人をも癒されたのです。このサマリヤ人は、赦し、癒し、受け入れて下さる愛と、見捨てられる事のない愛を知ったのです。だから、顔が地面につくまでにして主イエスの足下にひれ伏し、感謝を捧げたのです。

私たちには帰る場所があります。主イエスを信じる者には“天に故郷”が与えられます。この地上にあっても、主イエス・キリストという居場所があります。主イエスは私たちを受け入れてくださるからです。だから、どんな時も、そこに神の恵みを見つかる事ができます。主イエスの足もとにひれ伏す事の恵みを、信じる者は誰でも、与えられます。主は私たちに、うすぐまっている所から「立ち上がって、行きなさい。(19節)と、言われます。“よみがえって”、“立ち上がって”、“わたしを信じて、わたしと共に歩みなさい”と、言ってくださるのです。

私たちも、このサマリヤ人と共に、この恵みに与りたいと思います。感謝できない時も、病の時も、どんな時も。主よ、私たちに、揺るぎない信仰を与え、大きく賛美させてください。
(記 説教要約奉仕者)